

淀川のスーパー堤防整備～出口地区～

＝活力・うるおい・安全を求めて＝

1. はじめに

淀川は、源を日本最大の湖、琵琶湖に発し、京都府と大阪府の境で、北から桂川、南から木津川を合流し、そこから大阪平野を西南に貫流する、流域面積8,240km²を有する日本でも有数の大河川です。その流域内には、大阪市、京都市等の二大都市が発達しており、また数多くの衛星都市をかかえているため、流域内人口、資産は日本一の規模といわれています。特に、淀川下流域における人口・資産・都市中枢機能の集積は著しく、淀川の河川堤防が社会経済活動の生命線となっています。

また、淀川の歴史は洪水との闘いでもあり、明治以降においても本川の破堤による大災害は、明治18年、大正6年、昭和28年と体験しています。中でも、明治18年の洪水は、大阪市をはじめ淀川左岸一帯に大浸水をもたらし、未曾有の被害を与えています。

このようなことから、洪水災害から大都市を確実に守るために、従来の堤防より越水・漏水・堤体侵食・地震などに対して安全度の高い堤防を整備することが求められるようになりました。

2. 淀川のスーパー堤防整備の概要

淀川のスーパー堤防の整備区間は、氾濫区域内人口・資産・中枢機能等の集積状況などを総合的に勘案し、宇治川、桂川、木津川が合流する三川合流点から大阪湾に到るまでの35km、左右両岸合わせて70kmの区間となっています。

また、スーパー堤防の断面形状は、堤防天端から平地を階段状に形成して100～300m程度で堤内地盤にすりつけるため、従来の堤防によって阻害されていた河川景観が眺望できるようになるとともに、河川へのアクセスが容易になり、親水性の向上が図られるようになっています。

さらに、面的な市街地整備と一体的に実施することにより、スーパー堤防上の都市的利用が効果的に行われ良好なオープンスペースの確保が期待できるものであります。

3. 日本初のスーパー堤防・出口地区

それは一枚の葉書から始まりました。昭和62年度からスーパー堤防整備事業が着手され、すぐに淀川沿川の大規模地権者に対して土地利用更新の有無について意向打診が行われました。その結果、淀川左岸の枚方市出口2丁目における民間事業者（株）長谷工都市開発の土地利用計画を知り、スーパー堤防事業との調整を行った結果、昭和63年2月に協定が整い、昭和62年度、63年度の2ヶ年で盛土等の工事を実施し、昭和63年12月に全国で最初のスーパー堤防

建設省近畿地方建設局
淀川工事事務所調査第一課長 越智繁彦

が完成しました。その規模は、堤防延長約180m、幅約90mで面積約1.5haとなっています。また、スーパー堤防の施工区域は、新たな河川区域となるとともに、堤防の土砂排出を禁止するため、地役権が設定されました。

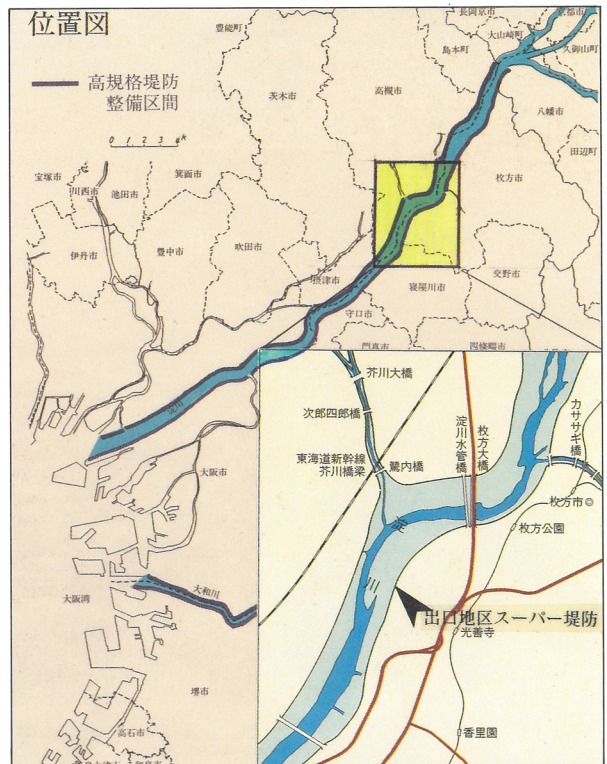
スーパー堤防上の民地部分は、住宅用地として利用され、平成元年8月から民間事業者が7階建（一部6階建）2棟、6階建（一部5階建）1棟、総戸数255戸の中層集合住宅の建設を行っており、今年9月に完了する予定です。

また、全国に先がけてスーパー堤防が完成したことを記念し、「竣工記念碑」の設置やその周辺環境整備も併せて行っており、淀川と一体となった良好な居住空間の創出が図られています。

4. 出口地区でみる事業効果

スーパー堤防の建設により、治水上の安全度が向上したり、災害時の避難地など地域防災機能が向上した事は当然の事とし、以下のような都市整備上の効果が考えられます。

- ・かつては堤防の陰に隠れた資材置場だった場所が、リバーフロント活用空間へと変ぼうしました。
- ・眺望が開けた事により、土地の高度利用が可能になりました。



淀川スーパー堤防整備区間及び出口地区位置図

- ・従来の堤防の斜面（まち側の斜面）が平坦地となり、河川空間と市街地を連続した空間にし、淀川河川公園とのアクセスを向上させました。

5. おわりに

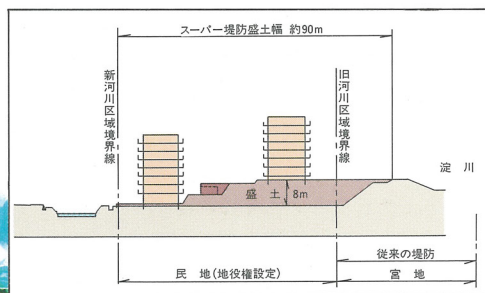
淀川のスーパー堤防整備は緒についたばかりで、出口地区の完成は、7万分の180が出来た事に過ぎませんが、大都市を貫流する河川の怖さをやわらげ、一方では大都市の中

で貴重なオープンスペースである河川のやさしさを増幅させるなど、多くの面で有意義なものとなっていると言えるでしょう。

淀川では、出口地区に引き続き、市街地整備との調和を図りながら城北地区、守口地区、大塚地区と着実にスーパー堤防事業が進んでいます。



出口地区スーパー堤防上での中層住宅の建設（平成2年4月下旬）



出口地区スーパー堤防横断面図



出口地区完成イメージパース